

## ワークショップ後に見る参加者の学びと変化 —「サマープログラム 2022」の振り返りを通して—

久保田育美（明石工業高等専門学校）

### 1. 本発表の背景

2022年8月、明石工業高等専門学校（以下、明石高専）はタイの中学生を対象に「サマープログラム 2022」（以下、SP2022）をプリンセスチュラポーンサイエンスハイスクール（以下、PCSHS）チョンブリー校で実施した。対象者であるタイの中学生は国立高等専門学校機構が推進する「タイ政府奨学金留学生事業」に応募したPCSHSの中学3年生であり、その後の選抜試験で合格した者は中学卒業後に日本語予備教育を経ないまま高専に入学する。

「サマープログラム」は、タイ政府奨学金留学生を受け入れている高等専門学校（以下、高専）が2018～2022年度に交代で実施したプログラムである。明石高専が担当したSP2022では、入学前に生徒が日本語学習の機会を十分に確保することが困難であるという事業の特徴を踏まえ、日本語学習並びに高専進学に対するモチベーションの向上を目的とした。目的達成のために、プログラムのメイン活動をドラマ制作とし、生徒が未来の高専生活を自分事として捉え、日本語を使い、チームでの協働が促進されるようなワークショップを企画した。そして本プログラムには、運営及び生徒のサポートを担う高専生（以下、サポート学生）も参加した。サポート学生は企画段階から本プログラムに携わり、実践当日は生徒をサポートしながら共に活動に参加した。

### 2. 本発表の目的

SP2022は、久保田（2023）において生徒の観点でプログラムの評価や意義が詳述されている。しかし、参加者の変化や実践の意義を見るにはその後の追跡調査が有効である。そこで本発表は、実践後2年が経過した時点で、生徒及びサポート学生の双方を対象に追跡調査を行い、[1]プログラムを通して参加者が得た学びや気づき、[2]その後の参加者の変化、[3]当実践の意義、以上3点を明らかにすることを目的とする。なお、生徒に関する目的[1]の達成度は久保田（2023）で示しているため、目的[1]においてはサポート学生についてのみ言及する。

### 3. 追跡調査の方法

2024年9月～11月、生徒2名（現明石高専生）とサポート学生6名に追跡調査のためのアンケートを実施した。アンケートは5件法及び記述式である。生徒への質問項目はSP2022実践の目的に、サポート学生への質問項目は実践当時の振り返り項目にそれぞれ関連させた。

表1 実践当時の振り返りと追跡調査の質問項目の関係性

	SP2022 実践の目的	追跡調査の質問項目
生徒	①日本語学習並びに高専進学に対するモチベーションの向上	①SP2022で得た高専／高専生に対するイメージと入学後の現実に違いがありましたか。それは何ですか。
	②生徒・学生同士の交流の促進	②-1 入学後、連絡や交流を続けている参加者はいますか。 ②-2 SP2022はあなたにとってどんなプログラムでしたか。
サポート学生	SP2022 実践当時の振り返り項目	追跡調査の質問項目
	③プログラムを通して最も印象に残ったことは何ですか。	③今現在においても印象に残っていることがありますか。それは何ですか。
	④自分について変わったこと、気付いたことがあれば教えてください。	④SP2022がきっかけで、自分について変わったこと(言動、考え方、興味関心)がありますか。それは何ですか。
	⑤今回の経験をどのように活かしたいと考えていますか。	⑤SP2022がきっかけで、その後新しく始めたこと、挑戦したことがあれば教えてください。

なお、生徒2名にはアンケートの回答内容をもとにインタビューも行った。

#### 4. 追跡調査の結果

表2 調査結果

	質問項目	5件法の結果(回答人数)	記述内容の要点
生徒	項目①	まあまあある(2)	高専生の雰囲気/授業における英語使用の程度/ 長期休暇中の課題の多さ/利便性の高さ
	項目②		②-1) 同じ中学校の生徒、期間中寮で同部屋だった生徒 ②-2) タイ人も日本人も仲良くなれる/先輩とともに活動/ 日本語の練習及び演技による勇気の獲得
サポート学生	項目③	とても感じる(4) まあまあ感じる(1)	母語が違う者同士で直接言葉を交わした経験/ 生徒の意欲、日本文化(漫画、アニメ)への関心、能力の高さ/ タイのインフラ整備の状況
	項目④	ある(4) どちらとも言えない(1)	体験から得る視野の広がり/新たな挑戦へのハードルの低下/ 国際交流、ボランティア活動、日本文化発信への関心の高まり
	項目⑤		海外での活動/国際交流団体の代表としての活動/ 英語学習、外国語学習/SNSによる日本文化の発信

回答は生徒2名及びサポート学生5名から得た。まず、生徒に関する項目①では、生徒がイメージと現実との違いを感じていることが分かる。高専生の雰囲気については、SP2022で接した時には感じなかった「真面目さ、忙しなさ、クールな感じ」を受けたという。また、英語による授業が思っていたより少なく、日本語学習の必要性をより一層実感したという回答も見られる。項目②-1及び②-2は、継続的な人間関係の構築がさほど見られないこと、それに対し、実践当時は参加者間の交流が活発であったことが見て取れる。他方、サポート学生に関する項目③では、自分自身が得た経験や生徒への感心が記述されており、生徒の能力では「創造力、行動力、協働能力」が挙げられている。また、停電や蛇口の泥水に驚くなど、日本での当たり前とは異なる点に印象深さを感じた様子も窺える。項目④及び⑤では、語学学習や日本文化発信を含め、広い意味で国際的な活動に取り組むようになった学生が多いことが分かる。

#### 5. 考察とまとめ

前述した本発表の目的 [1]～[3] に沿い考察する。まず [1] については、サポート学生の異文化理解や視野を広く持つ姿勢、相手の良さや強みを発見する力が養われたと考えられる。続いて [2] について、生徒にとって SP2022 は、それ自体がその後の生徒に大きな影響を及ぼしたとは明確に言えないまでも、高専を知り、仲間と日本語を使って活動ができたという、高専進学を目指す過程での一体験となり得たと評価できる。他方、サポート学生にとって SP2022 は、新たな目標を設定し、国際的な領域に関心を持って活動を始める契機となったと言える。実は各学生が書いた自分の変化に関する記述には、実践当時の振り返りと重なる内容が見られる。これは、サポート学生が当時感じた変化を現在でもなお自覚していることを裏付けていると言えるだろう。

当実践は、生徒が仲間とともに日本語で活動する場となった点、そして、サポート学生が得られた経験や学びを次の挑戦に繋げる糧とすることができた点で意義がある（目的[3]）。前者は、話し合い、考え、表現するという活動の各過程を高専生も交えて日本語で行ったこと、後者は、普段と異なる環境で母語が異なる相手と触れ合い、企画・実施側にも立ちながら活動できたという本プログラムの側面が、本発表で示す意義を支えるものと考えられる。ただし、生徒は調査対象が2名であることから、生徒に関する結果はあくまでも傾向の一つに留めることとする。

#### 【引用文献】

久保田育美（2023）「ドラマ制作から初級日本語学習者は何を得たか—高専進学を目指す中学生を対象にした「サマープログラム2022」のデザイナー—」子どもの日本語教育研究、6巻、pp.64-85.